

アルバニア語の諸方言における 目的語重叙表現の比較

井 浦 伊知郎

0. 序

アルバニア語の方言を分類すると、現アルバニア共和国内のものと周辺国・地域内のものとに大別される。前者は、アルバニアを東西に横切るシュクムビン川 (Shkumbin) を境界線として、北のゲグ (gegërishtja)、南のトスク (toskërishtja) に分かれる。後者には、ギリシア、イタリア、ブルガリアなどに居住するアルバニア人の方言が含まれる。

また、更に細かく見れば北部においてコソヴォ (セルビア) とその他の周辺国とでは微妙な形態・音韻上の差異が存在し、アルバニア南部方言とギリシア国内のそれとの間にも、同程度の違いがあることが知られている。

本論文では、非アルバニア語圏で使用されているアルバニア語の方言から次の3つ；

- ① イタリア南部におけるアルバニア語
- ② ギリシャにおけるアルバニア語
- ③ ブルガリア南東部におけるアルバニア語

について、主要な先行研究と、それらに収録されているテキストをもとに、人称代名詞の機能を各方言について比較する。特に弱形人称代名詞による目的語の重叙表現の傾向、関係節内におけるその振舞いについて、標準語との比較も交えて考察する。

1. 各方言の概要

1.1. Cosenza 方言

正確には Cosenzaより約20kmに位置する小村Falconara Albaneseの例を取り扱う。住人 (Albanesi) はアルバニア語を家庭内言語 (lingua di casa) として、イタリア語を外の社会での公用語 (lingua di pane) として用いている。教会の記録によると、1627年からアルバニア人の居住が確認されている。かつて3000人以上いた定住者は、1960年代後半の調査時点で1800人程度に減少している。なお、今日イタリアに定住するアルバニア人は8万人程度とされる (シチリアを含む)。

今回は、Martin Camajらによる1970年前後の調査・収集記録 (Camaj 1977) を参照する。主な話者はIldegonda Manes という老婦人で、テキストには民謡や詩も含まれているが、

ここでは散文のみ取り上げる。

1. 2. Arvanitika

アルバニア人の南下は既に13世紀から始まっており、現在ギリシアに定住するアルバニア人は約5万人と言われる。彼らの用いるアルバニア語が語彙面でギリシア語の影響を多大に受けているのは言うまでもない (*vasi' æ* 『王』など) が、統語上アルバニア語の独自性をかなり保っていると思われる点を、2. 以下で見ていく。

彼らギリシアのアルバニア人 (Arvanitis) が用いるアルバニア語は Arvanitikaと呼ばれる。そしてこの呼称は、特にアテネ市北方からカルキスに及ぶ地域で用いられる北東アッティカ・ボイオティア方言を指す。本論文でもこれに倣い、以下、北東アッティカ・ボイオティア方言を単に Arvanitika と称して説明を進める。

現在 Arvanitika に関する包括的な文献がドイツで刊行されつつあり (Sasse 1991b)、以下の例文もこれに拠る。

1. 3. Mandrica 方言

Mandrica 村はブルガリア南西部 (ギリシア・トルコ国境付近) の Ivaillovgrad 郡にあり、今日、同国内でアルバニア語が話されている唯一の地域と言われる。Sokolova (1977, 1983) によれば、同村は15~16世紀にアルバニア (特に Korça) からの移住民によって形成され、今世紀の初めに既に文献で言及されている。1926年時の人口は1082人だったが、その後十年毎に約百人ずつ減少し続け、1965年の時点で 593人となった。この内、80%程度がアルバニア語を話しているという。アルバニアの学者による本格的な言語研究は1967年以來行なわれている。

Mandrica 方言には、標準語において死滅したゲグの古形 (動詞 *kle*, 名詞対格語尾 *-në* など) が保持されているという特徴もあり、通時的考察の対象としても興味深い。また統語面でブルガリア語からの影響の可能性も指摘されている (Sokolova 1983, 149 または Mayer 1988)。本稿では Sokolova により集められたテキスト (1983) を用いる。

1. 4. 人称代名詞

ここで、各方言の人称代名詞の人称・格変化をひとまず単数形について示しておく。

(標準形)

| | sg. 1 | sg. 2 | sg. 3 |
|------|---------------|--------------|----------------------------|
| nom. | <i>unë</i> | <i>ti</i> | <i>ai(m.) ajo(f.)</i> |
| acc. | <i>mua/më</i> | <i>ty/të</i> | <i>atë/e</i> |
| dat. | | | <i>atij(m.) asaj(f.)/i</i> |

[以下強形 / 弱形]

(Cosenza)

| | sg. 1 | sg. 2 | sg. 3 |
|------|-----------|----------|-----------------------|
| nom. | 'u | 'ti | 'aj(m.) a'jo(f.) |
| acc. | 'mua/m(ə) | 'ti/t(ə) | a'tə/e, a |
| dat. | | | 'atij(m.) a'saj(f.)/i |

(Arvanitika)

| | sg. 1 | sg. 2 | sg. 3 |
|------|---------|--------|-------------------------|
| nom. | 'u | 'ti | 'aj(m.) a'jo(f.) |
| acc. | 'mua/mə | 'ti/tə | a'tə/e |
| dat. | | | a'tija(m.) a'saja(f.)/i |

(Mandrica)

| | sg. 1 | sg. 2 | sg. 3 |
|------|-------------------|--------------------|----------------------|
| nom. | u, un, unë | ti, tinë, tin etc. | ay,aju, ai, aj |
| acc. | mua, muva, mva/më | ty, tju, tjunë/të | atë/e |
| dat. | /mi | ty, tju /të | asajt, asat, asat'/i |

これらの形態的特徴として、最初の2方言では1人称の標準形 unëでなく古形 uが用いられている。一方Mandrica方言では1人称標準形 unëと古形 uが併存する。また標準語や他方言では対格・与格の弱形が同一化しているが、Mandrica方言では古形に由来する弱形与格miがしばしば現れる。このことは、アルバニア語の方言がしばしば古形を保持していることのあらわれでもある。

(1) Sô mi! 「僕に話してくれ」

say-imp. sg. 2 1. sg. dat.

(Më thuaaj!)

[以下 () 内は標準語による書き換え例]

2. 代名詞弱形による目的語重叙の傾向

バルカン半島の諸言語に見られる(弱形人称代名詞による)目的語の重叙表現はアルバニア語においてとりわけ顕著である(Demiraj 1994)が、ここでは、この傾向を各方言について比較する。

2.1. 一般的な目的語重叙の傾向

2.1.1. Cosenza 方言

強形人称代名詞はほとんどの例で弱形を伴う。強形代名詞について、重叙はほぼ義務的であると思われる。

(2) a'jo u -'tə a'tire

she 3. pl. dat. say-aor. sg. 3 them-dat.

「彼女は彼らに言った」

(ajo u tha atyre)

一方普通名詞については、間接目的語に対する重叙の弱形が見られた。これも義務的なものと言える。しかし、直接目的語に対する重叙表現は見当たらなかった。

(3) 'nusja i 'vu ku' rornə ' ðandrit

bride-nom. 3. sg. dat. put-aor. sg. 3 crone-acc. the bridegroom-dat.

「花嫁は花婿に冠をかぶせた」

(nusja i vu kurorën dhëndrit)

2.1.2. Arvanitika

人称代名詞は弱形のみでも用いられるが「特に重きを置く場合」には強形が併用され、普通名詞と文法的に一致する弱形が現れることもある。(Haebler 1965, 87, 93-95 また Sasse 1991b, 322f., 329ff.) (註2)。

(4) do tə vras e' ðe ti. 「おまえも殺してやる」

will particle+2. sg. acc kill-conj. sg. 1 also you

(do tə vras edhe ti.)

(5) i kano' jis e' ðe a'ta. 「それらもかたづける」

3. pl. acc. finish-sg. 1 also them

(i përkryej edhe ata.)

実際には、目的語名詞と弱形の組み合わせはかなり頻繁に用いられており、強調の意味合いはそれ程大きくない様に見える。また間接目的語の場合、普通名詞や強形人称代名詞を伴うか否かに関わらず、弱形与格を動詞の前に置くことは(標準語の場合と同様)ほとんど義務的と思われる。

(6) e 'vrau je'rina 「彼はその男を殺した」

3. sg. acc. kill-3. sg. aor the man-sg. acc.

(e vrau njeriun.)

(7) ia 'θjnə ' embarinə θa' nas.

3. sg. dat. +3. sg. acc. say-3. aor. pl. the name-sg. acc.

「彼らは彼をサナスと名付けた(彼にサナスという名を言った)」

(ia dhanë emrin Th.)

(8) i bi'e 'orɣanojt. 「その楽器を演奏する」

3. sg. dat. play-sg. 1 instrument-sg. dat.

(i bie instrumentit)

2. 1. 3. Mandrica 方言

この方言では標準語とほぼ同じ様に重叙が生じている。古いアルバニア語では 1・2 人称の代名詞についてのみ重叙が生じていたことが知られている (Demiraj 1993) が、古語の名残りが強い Mandrica 方言でもその様な偏りは見られない。

(9) Mva më sa.

「私に彼は言った」

me me say-aor. sg. 3

(Mua më tha)

(10) Ty ot të kam bilë.

「私はおまえを娘にしよう」

you part. you have-sg. 1. daughter

(Ty do të të kam bijë)

(11) Atë ote mármë.

「我々はそれを買おう」

3. sg. acc. part. + 3. sg. acc. take-pl. 1 (Atë do ta marrim)

(12) Bukën mos e lish.

「パンを残すな」

bread-df. sg. acc. not 3. sg. acc. leave-conj. sg. 2 (Mos e lër bukën)

2. 2. 関係節における目的語重叙の傾向

アルバニア語では、関係節内で目的語として機能する関係代名詞についても弱形人称代名詞による重叙が起り得る (3. で詳述) (註 2)。以下、各方言の傾向を示す。

2. 2. 1. Cosenza 方言

関係代名詞は *tʃə* (不変化) で、関係節内で間接目的語として振舞う際に重叙を伴う例がいくつか見られる。ただし義務的なものではないと思われる。

(13) *e* *'mori* *t-'birin* *tʃə* *-i* - *'θjn* *konstan'din*

and take-aor. sg. 3 the son that 3. sg. dat say-aor. pl. 3

「そして彼には息子ができ、コンスタンディーンと名付けた」

(*e* *mori* *të* *birin*, *të* *cilit* *i* *thanë* K.)

2. 2. 2. Arvanitika

関係代名詞には *tʃə* (不変化) がある。*tʃə* が関係節内で間接目的語として振舞う場合 (ただし間接目的語を用いる例の数そのものが直接目的語の場合より極端に少ない) には、

ほとんどの場合に弱形人称代名詞を伴う (Sasse 1991b, 309ff.)。

(14) *nə ka'tund tʃə ia* ' *θnə mi ʔo' ʃat*

one village that 3. sg. dat. + 3. sg. acc. say-pl. 3

「ミレスと呼ばれる（人々がミレスと呼ぶ）ある村」

(*njə katund të cilit i thonë M.*)

一方 *tʃə* が関係節内で直接目的語となる時、人称代名詞弱形が現れないこともある。

(15) *pandə' ʔoɾi tʃə (e)* ' *b ʌeva* 「私が買ったズボン」

trousers that 3. sg. acc. buy-aor. sg. 1

(*pantallonat që i bleva*)

関係節内で間接目的語として振舞う関係代名詞が重叙を頻繁にとるという点は、アルバニア語の一般的な傾向に近い。なお同じギリシアのSalamis方言では、関係節中に何か別の直接目的語を含む場合、こうした間接目的語の重叙は常に行なわれるという指摘がある (Haebler 1965, 97f.)。例えば次の様な場合である。

(16) ' *gruaja tʃə ja* ' *ʔa ʃə* *tene' cen ə*

woman that 3. sg. dat. + 3. sg. acc. give-aor. sg. 1 can-acc.

「私がプリキ缶を渡した女性」

(*gruaja të cilës ia dhashë teneqenë*)

直接目的語との対比の必要性から与格弱形が用いられるという指摘は興味深い。例えば例(14)にもその可能性がある。ただ北東アッティカ・ボイオティア方言の例では、特にこうした対比の必要がなくても、間接目的語の重叙はほとんど義務的に行われている様に見える。

2.2.3. Mandrica方言

関係代名詞は標準語の *që* (註3) の異形 *qe* または *qi* が用いられる。*qi* はイタリアやギリシアのアルバニア語方言にも存在するが、*qe* はMandrica方言のみである。更にこの方言では *qe* が *çe* ともなる (註4)。

(17) *Pasha kezánnë qe pagëzojti.*

see-aor. sg. 1 child-acc. which baptize-aor. sg. 3

「私は、彼が洗礼を施した子を見た」

(*Pashë djelin që (e) pagëzoi*)

(18) *Ni hále qí pásha klé nga Sív kládenec.*

one woman which see-aor. sg. 1 be-aor. sg. 3 from

「私が見たある女性は、スィフ・クラードネツの出身だった」

(*Një grua që (e) pashë qe nga S. k.*)

qeが関係節内で間接目的語として用いられる例は、今回使用したテキスト中になかった。少なくとも直接目的語として用いられている場合、（標準語に見られる様な）弱形人称代名詞による重叙も見られない。あるとしても、きわめて頻度が低いと思われる。

3. 考察

標準アルバニア語において、目的語の重複には次の様な傾向がある。間接目的語に対しては与格弱形が常に重叙代名詞として現れる。即ち与格の重叙は義務的である。これに対して直接目的語は動詞に先行して置かれる場合、また動詞の後に置かれる場合でも談話の旧情報として扱われていれば対格弱形を伴うことが多い。逆に言えば、談話の中にあって特別注意を喚起されるべき情報、または単純に新情報として現れる直接目的語は、重複しないことになる。その様な特別な条件がない限り、目的語の重叙表現は標準語にあってはむしろ普通に頻繁に起こっているとも言える。

一方、関係節内での重叙については、標準語の場合二つの可能性がある。一つは屈折変化する *i cili* が用いられる場合（主に書き言葉）で、いかなる時も関係節内の目的語として振舞う際には重叙代名詞を伴う。もう一つは、他方言にも類似した形態が存在する *që* を用いる場合で、間接目的語としては常に重叙（間接目的語として用いられる例は少ないが、皆無ではない）するが、直接目的語としての重叙は義務的でない。明確な語形変化を伴う関係代名詞で（冗長とも思える）重叙が常に起こり、文法的役割の曖昧な関係詞が重叙を義務的にとらない理由は、まだ明らかではない。

こうした事柄を踏まえ、今回比較した3方言について、例文総数に対する重叙現象の頻度を考慮して図示すると概ね次の様になる。この表では、個々の文例における意味内容の差異は考慮されていない。

| | Cosenza | Arvanit. | Mandrica | 標準語 |
|--------|---------|----------|----------|-----|
| 間接目的語 | + | ++ | ++ | ++ |
| 直接目的語 | — | + | + | + |
| (関係節内) | | | | |
| 間接目的語 | + | +(++) | (?) | ++ |
| 直接目的語 | — | + | — | + |

(++重叙は義務的 +重叙は任意 —重叙なし)

Cosenza 方言では直接目的語の重叙がほとんど見られず、重叙の定着度が低いのに対し、他の2方言では重叙例が比較的によく見られる。この点でこの2方言の統語構造は標準語のそれに近い。ただ、3方言に共通した点として、間接目的語の重叙は（義務的ではないにせよ）頻繁に生じていると考えられる。間接目的語の統語機能については共通の傾向がすでにできあがっている可能性がある。

一方、関係節内の重叙はどうか。Mandrica方言に不明瞭な点が残ることを除き、他2方言には、関係代名詞（しかも不変化型）が間接目的語として振舞う場合に重叙を伴うことが多かった。標準語の様に義務的であるかどうかは疑問が残るが、ここで間接目的語の統語機能における共通性も考えられる。一方直接目的語としての重叙頻度は、標準語と比較すれば極端に低いが、Arvanitikaの例は、標準語の傾向にまだ近い。

ただし3方言とも、標準語の場合と比較すれば重叙の頻度は高くはない。これについては話し言葉としての制約（過剰に複雑な文構造を避ける話者の判断）などが背景として考えられる。

* 本論文は、1997年9月6日に西日本言語学会で発表した原稿に加筆訂正したものである。旧稿では、ギリシア語圏におけるアルバニア語としてサラミス島（Salamis、ギリシア名 Koulouri）の方言（Haebler 1965）を取り上げたが、本稿では、発表後に入手したより新しいArvanitikaの例文と入れ替えた。

註

- (1) ルーマニア語でも *pe care* を用いて同様の表現が見られる。Beyrer 他 (1987) 参照。
- (2) Arvanitika には、目的語を前置詞句で表現するという、本来のアルバニア語には見られない用法が存在する（Sasse 1991b, 333f.）。強形代名詞も前置詞句に置き換えられることが多い。

' *hangre* *nga* *a' to* ' *moŋa* 「君はそのリンゴをを食べた」
eat-aor.sg.2 from those apple-pl. (həngre ato mollë)

こうした例は関係節内でも見られ、代名詞弱形による重叙に代わって用いられていることがある。標準語にこのような用法はほとんどない。

' *gruaja* *t fə* *vdes* *par a' tə* 「私が（その人のためなら）死ねる女」
the woman that die-sg.1 for her
(gruaja së cilës i vdes/ gruaja për të cilën vdes)

- (3) アルバニア語における *q* は無声硬口蓋閉鎖音 [c]、*ç* は無声硬口蓋破擦音 [tʃ] を示す。

(4)Mandrica方言には標準語（主に文章語）で用いられる*i cili*（屈折変化を伴う）は存在しない。ただし、疑問代名詞としての*çili*は用いられる。この方言には1人称代名詞弱形が本来の意味を失い、単なる疑問代名詞の一部として使われるという珍しい用法もある。

| | |
|--------------------------------------|-------------------------------------|
| Ç' <u>më</u> <u>bëni</u> ? 「私に何をする？」 | <u>Çimë</u> <u>bëni</u> ? 「何をしている？」 |
| what me do-pl.2 | what |
| | (Ç' bëni?) |

また他の2方言にも*i cili*に相当する関係詞はないが、これについては、方言テキストが専ら話し言葉中心で、不変化形が好まれるということも考慮すべきである。

文献

- Beyrer, Arthur/ Bochmann, Klaus/ Bronsert, Siegfried (1987): *Grammatik der rumänischen Sprache der Gegenwart*. Leipzig (Verlag Enzyklopädie)
- Buchholz, Oda/ Fiedler, Wilfried (1987): *Albanische Grammatik*. Leipzig (Verlag Enzyklopädie)
- Camaj, Martin(1977): Die *Albanische* Mundart von Falconara Albanese in der Provinz Cosenza. München (Rudolf Trofenik)
- Demiraj, Shaban(1993): *Historische Grammatik der albanischen Sprache*. Wien (Österreichische Akademie der Wissenschaften)
- Demiraj, Shaban(1994): *Gjuhësi ballkanike*. Shkup (Logos-A)
- Haebler, Claus(1965): *Grammatik der albanischen Mundart von Salamis*. Wiesbaden (Otto Harrassowitz)
- Heidrun Kellner(1972): *Die albanische Minderheit in Sizilien*. Wiesbaden
- Jochalas, Titos P.(1983): Die Balkanlinguistik in Griechenland. *Ziele und Wege der Balkanlinguistik*. Wiesbaden (Otto Harrassowitz), 104-114
- Mayer, Gerald L.(1988): *The Definite Article in Contemporary Standard Bulgarian*. Wiesbaden (Otto Harrassowitz)
- Sasse, Hans J.(1991a): Zur Situation der Erforschung des Arvanitischen. *Aspekte der Albanologie*. Wiesbaden (Otto Harrassowitz)
- Sasse, Hans J.(1991b): *Arvanitika. Die albanischen Sprachreste in Griechenland*. (Teil 1) Wiesbaden (Otto Harrassowitz)
- Sokolova, Bojka(1983): *Die albanische Mundart von Mandrica*. Wiesbaden (Otto Harrassowitz)
- Sokolova, Bojka(1977): Quelques particularités de la langue albanaise parlée dans le village de Mandrica. *Akten der internationalen albanologischen Kolloquiums* (Innsbrucker Beiträge zur Kulturwissenschaft Sonderheft 41), 583-594